

佳作

あいちん・びびがいのめっせーじ

茨城県 ひたちなか市立長堀小学校一年 海老澤 茉波

いちねんまえのはちがつじゅうはちにち。きょうは、あいけんのびびがなくなつたひ。

びびは、わたしがうまれるまえからおかあさんがかっていたパピヨン（ふらんすのこいぬ）。わたしが、しょうがつこうにあがるまえまで、いっしょにくらしていたかぞくのいちいんだつた。

おかあさんのはなしによると、わたしがあかちゃんだつたころ、にかいのべびーべつでなっているわたしを、いっかいにいるおかあさんのもとにかけより、ほえながらしらせてくれたという。おかあさんのあしもとで、ほえながらよんでくれたのだ。おかあさんとわたしのそばには、いつもびびがいた。

こがたけんは、じぶんよりもあとからかぞくになつたひとにいじわるをするときいたことがある。でもびびはいつもやさしかった。めがくりくりしていて、はなとおなじおおきさで、ぬいぐるみのように

かわいかつた。さわると、さらさら、ふわふわで、とてもきもちよかつた。

わたしのせいちょうとともに、だっこ、さんぽ、ひるね、えさやり、しつけ（おて、おすわり）と、びびとすごすじかんがふえていった。にさいとししたのいもうとがうまれても、びびはとくべつなそんざいになつていった。

きよねん、びびはじゅうななさい（ひとならはちじゅうよんさい）になつていた。としをとりに、おなかにできたできものをとるしゅじゅつをした。そのご、みみがとおくなり、からだをさわられるとおこることがおおくなつた。なくなるころには、はなをさわられても、あしをさわられてもおこらなくなつていた。

パピヨンのじゅみょうは、ながくいきられてもじゅうごねんときいたことがある。おせわになつたどうぶつびょういんのせんせいは、

「しんぞうのびょうきもちながら、じゅうななさいまで、とてもながいきしてくれました。はいにがつぺいしょうがあるとがんばれないことがおおいなか、がんばりぬけたのはかぞくのおかげ。だいおうじょうだとおもいます。」

と、びびのがんばりをほめてくれました。

わたしたちかぞくは、びびにみまもられながら生きてきた。びびもまた、わたしたちかぞくにみまもられながら生きてきた。びびはわたしたちかぞくのみんなにかわいがられ、びびもまたひとのころのなかにはいりこみ、おたがいに、ころをつうじあうことができたとおもっている。

おかあさんとはなやさんで、びびにあうはな（びんく、しろ、きみどりいろ）をかい、おそなえした。いきぐるしさにたえ「かぞくといっしょにいたい」と、さいごまでがんばってくれたびびからのめっせーじを、わたしははっきりとうけとつた。